

【実践報告】

カンボジア「子どもの権利」研修ツアーに参加して

比楽 万友*・岡 みゆき**

キーワード：子どもの人権 カンボジア 児童労働 シーライツ 物乞い

はじめに

2017年2月10日～2月16日、子どもの支援事業や子どもの権利活動を行っている特定非営利活動法人 国際子ども権利センター C-Rights/シーライツ（以下シーライツ）の主催するカンボジアの「子どもの権利」研修ツアーに参加し、子どもたちへのボランティア活動と「子どもの人権」、カンボジアにおける社会的弱者としての子どもや女性について学んだ。日本からの参加人数は15名であり、参加者と共に活動した。シーライツは、世界のすべての子どもたちが、いつでも、どこでも、どんな場合でも、国連「子どもの権利条約」でうたわれているすべての権利を保障され、夢や希望を語りあい、社会に参加できる、そんな世界をめざして活動している。カンボジア事業では農村部であるタナオコミューンを中心に貧困から物乞いや物売り、違法な出稼ぎに行く子どもたちに教育の機会を与える活動をしている。また、子どもから大人へ「子どもの権利」や違法な出稼ぎの危険を伝える啓発活動を行っている団体である。

実際に現地に赴くことで把握できた、カンボジアにおける子どもたちの権利の在り方や学習環境などについて述べていく。

カンボジアについての基礎知識

カンボジアは日本から、近年アンコールワット遺跡観光などで有名になっているが、容易に足を運べる国ではなく、あまり馴染みのない東南アジアの国である。年間の平均気温は24℃あると報告されている。面積はおよそ18万平方キロで、日本の約半分くらいである。ベトナム、ラオス、タイの3国と国境を接し、南はタイランド湾に接している。あとの3方は標高400メートルから1500メートルという低い山地や山脈に囲まれ、中心部は盆地のように平らで低い地形をなしており、国土の多くを森林で占められている。2017年の報告では人口は

*大阪府羽曳野市立植生幼稚園

**大阪大谷大学教育学部



図1 カンボジアでの移動

1,500万人で人口の90%がカンボジア人（クメール人）とされている。公用言語としてはカンボジア語（クメール語）が使われている。GDPの水準が低く、特に農村部では貧困層が多い。年収は日本円に換算すると24万円、最低月収は1万5千円程度だと言われる。

1980年代カンボジアではベトナム戦争や政権争いに紛争が絶えず起こっていた。40年前に、クメールルージュ（カンボジア共産党）が政権を握り、ポルポト政権が誕生した。ポルポトは国の発展のため知識人、医者、職人、教師などを虐殺したことは今なお

記憶に刻まれている。カンボジアの人口に高年齢が少ないのもポルポト政権時代の影響があるという政治的背景がある。

カンボジアの子どもたちの権利について

カンボジアの農村部では未だに子どもの人身売買や児童労働、性的搾取があり、十分に守られずに生活している子どもたちが多くいる状況にある。カンボジアに到着しシーライツの甲斐田万智子氏からカンボジアの子どもたちについてのワークショップが行われた。国際子ども権利センターが掲げている子どもの権利は大きく分けて4つある。

- ①生きる権利 ・健康に生まれ、防げる病気などで命をうばわれないこと
・病気やケガをしたら治療を受けられること
・人間らしく生きていくための生活水準が守られること など
- ②育つ権利 ・自分の名前や国籍を持ち、親や家族と一緒に生活することができること
・教育を受け、休んだり遊んだりできること
・考えや信じることの自由が守られ、自分らしく育つことができること
- ③守られる権利 ・あらゆる種類の虐待や放任、搾取、有害労働などから守られること
・障がいのある子どもや少数民族の子どもなどは特に守られること
・戦争から守られ、犠牲になった子どもの心や身体が守られること など
- ④参加する権利 ・自由に意見を表したり、集まってグループをつくったり、自由な活動を行ったりすること。

カンボジア「子どもの権利」研修ツアーに参加して

- ・プライバシーや名誉がきちんと守られること
- ・成長に必要な情報が提供され、子どもにとってよくない情報から守られること。

これらの権利をしっかりと定着させ、子どもたちの声を聴き、地域住民、学校の教師、行政とも連携しながら、マニュアルや教材整備をすすめ、自主性・持続性を高めると話された。現在、企業などにも求められる持続可能な開発目標（SDGs）をも含んでいると感じられた。

滞在地と日程

2月10～12日はカンボジア東部に位置し最もベトナムの国境に面しているスバイリエン州に滞在。

2月13～15日はカンボジアの首都であるプノンペンに滞在

2月16日はカンボジア北西部に位置するシムリアップに滞在（図1）。

訪問地1 スバイエルン州タナオ

1. タナオコミュニン小学校

滞在地であるカンボジアスバイリエン市から車で舗装されていない道路を3時間ほど走り、ベトナムの国境に近い貧しい農村地域であるタナオコミュニンに到着した。訪問したタナオコミュニンの小学校は、シーライツが啓発活動を実践している学校でもある。以前は農業だけでは生計が困難なことから、子どもを伴ってカンボジア中心部や隣国のベトナムに出稼ぎに行く世帯が多く、学校に行くことができない子どもたちが多くいたという話を聞いた。シーライツが「子どもの権利」について啓発活動を行い、少しずつ減少してきているようだが、まだまだ厳しいのが現実であるようだ。この学校では小学生低学年から中学生3年生までの子どもたちが1つの教室に入り「子どもの権利」について学習していた。教室は床が土で天井の柱には鳥の巣があるという光景であった。小学校の教室に人身売買、児童買春の言葉が飛び交うのを目の当たりにし複雑な気持ちになった。同時に子どもの権利条約について声を揃えて読み上げている場面があり、「子どもの権利」について周知されていると感じることができた。教室での子どもたちの様子は、教師の質問に全員が手を挙げて応えようとする前向きな姿であった。自分の気持ちを周りに伝えようという気持ちが前面にでていて、目がキラキラ輝いていた。よそ見をしたり友だちと話をしたりする子どもはおらず、非常に積極的に発言が交わされている様子に驚いた。日本の子どもの現状とは少し違うと感じた。しかし、授業中に出たゴミやお菓子のゴミを教室の窓から外に投げ捨てていた場面や、気に入らない友だちをいきなり叩く姿が見

られ、倫理的な学校内でのルールやきまりがあまりないのではないかと感じるとともに、本当の意味での「子どもの人権」理解には至っていないような気がした。

「子どもの権利」についての授業後、筆者は人形劇、「だるまさんが・・・」と「赤ちゃんマン」のマジックを実践し（写真1）、ツアー参加者の他の学生が日本から準備してきた日本の文化や四季に触れるワークショップを行い交流を深めた（写真2,3）。



写真1



写真2



写真3

2. チャイルド・フレンドリー・スペース

日本でいう児童館のようなものであり、シーライツのスタッフや地元の教師などが子どもたちの学習支援を行っている。ここでは、字を教えたり、みんながゲームをしたりするスペースを提供している。小さな図書室もあり読書もできるようになっていた。また、人身売買、児童労働防止のために取り組む学習活動も行っている。チャイルド・フレンドリー・スペースでは子どもたちの中からピア・エデュケーターと呼ばれるリーダーを育成している。ピア・エデュケーターは子どもたちの代表となり年下の村の子どもたちになぜ、人身売買、児童労働がいけないのかを伝える役割をになっている。カンボジアでは人身売買、児童労働がいけないことであることを知らないのは子どもたちだけではなく大人も多いと聞いた。そんな現状の中ピア・エデュケーターの存在は大きく、子どもにとって心強い存在になっていると思った。

～物乞いをする子どもとの出会い～

チャイルド・フレンドリー・スペースでの訪問が終わり、外に出ると私たちの方を羨ましそうに見ている男児がいた。その男児は汚れた短パンにTシャツ、はだしで片目が不自由であることが見受けられた。スタッフから話を聞くと、男児は家族がおり兄弟もいる。兄弟は上等な服を着て学校に通っている。両親の労働では生計が立てられなかったことから、この男児がボロボロの服を身にまとい物乞いにベトナムまで行くことで、1日で300ドル（1ドル=120円換算）を稼いで帰ってくるという。話かけると周りの子どもたちと何ら変わりのない様子で微笑んでくれた。彼の顔には家族を養っているという誇りというようなものを感じることができたが、日本人の感覚ではやはり「かわいそうに」と思ってしまう。カンボジアに来てから物乞いをする子どもたちの話や物乞いビジネスと言われるものを学んだ。「物乞いにお金を与えてはいけない、自分で働き稼ぐということを教育によって教えていかなければならない」という

ものであった。実際に目の当たりにすると、とても複雑な気持ちになり心が痛んだ。障がいがある子どもが生まれた場合、治療や療育が優先されるのではなくて、労働力として物乞を強いられる現状を知り、児童労働の恐ろしさと「子どもの権利」が守られる方法を考えさせられた。

3. 子どもクラブ

地域の子どもたちで結成された「子どもクラブ」を訪問した。「子どもクラブ」と言っても、村の真ん中にある青空広場のような場所に、幼い子どもから中学生、高校生くらいの子どもたちが集まって「子どもの人権」を学ぶというものである。小学生の子どもが幼い妹、弟を連れて一緒に遊びに来ているという雰囲気であった。参加すれば、おやつや学用品など何らかのおみやげがある、そのこともあり近隣の子どもたちの多くが参加していた。前述の小学校で行ったものと同様に、日本の学生による子ども達へのワークショップが行われた。日本の話や四季を紹介する写真を見せたりするなどであったが、通訳を介すとタイムラグがありうまく伝わっていない。言葉の壁だけでなく、うまく交流できていないと感じられていた。筆者の順番になり人形劇、「だるまさんが・・・」と「赤ちゃんマン」のマジックを子どもたちの前で披露した。幼児教育で培った実践的な遊びを展開したことで、子どもとの距離が縮まり子どもたちも笑顔を見せてくれ交流が深まったと感じられた。子どもとの交流は言葉ではなく実践的なふれあいが大切であると学んだ（写真5）。その後、持参した「早寝早起き朝ごはん」の折り紙で学生と子どもたちが一緒に紙風船を作り、投げ合ったり全員でミニゲームをしたりして運動遊びを展開しあった。（写真6）。お互い言葉がわかるわけではないが、身体を動かすことで言葉の壁を越え、楽しむことができた（写真7）。言葉は通じなくても、身体を一緒に動かすことで心が通じあえる交流ができたことがうれしかった。



写真5



写真6



写真7

訪問地2 プノンペン

1. テウルスレーン博物館

首都プノンペンは発展著しく、都心に通じる道の交通渋滞は酷いものであった。街並みには

おしゃれなカフェが立ち並び開発の中核を担っているビジネスマンが闊歩していると感じられた。プノンペンでは有名な観光場所になっているテウルスレーン博物館、キーリングフィールドに向かった。テウルスレーン博物館はポルポト政権で知識人、医者、職人、教師などを収監した刑務所であり次々に虐殺が行われていた場所である。もとは高等学校だったようで教室は拷問や収容をするために改造されていた。施設内を見学していると収容所や首吊り場が生々しくそのまま残されており、つい最近まで残虐な行為がここで行われていたことに衝撃を受けた。2年9か月の間に14,000~20,000人が収容され、そのうち生還できたのはたった8人だったそうだ。

2. キーリングフィールド

キーリングフィールドは映画化もされているクメールルージュにおいて大量虐殺された刑場である。慰霊塔に花を添え黙祷を行った後に見学を行った。見学している遊歩道にも、ところどころ白骨が露出しており想像を超える風景であった。慰霊塔の中には数え切れないほどの頭蓋骨が積み重ねられていた。年齢別に置かれており、子どもから高齢者の頭蓋骨があった。

虐殺された人がいれば虐殺した人もいると考えたとき恐ろしくなった。なぜ、何の罪のない人たちが次々と虐殺されなければいけなかったのか。カンボジアにはこんなに悲しい歴史があることを知り、罪のない人がたくさん死んでいく戦争、内戦はあってはならないことだと感じた。

3. アフェシップ・フェア・ファッション

アフェシップ・フェア・ファッションでは人身売買、性的搾取の被害にあった経験をもつ女性が暴力に怯えることなく安心な生活を得られるような職業訓練を行い女性の自立を援助している（写真8）。この訓練を終えた女性たちが製作した小物やアクセサリーやカバンなどを販売して得た利益を還元しNGOなどの援助を得て稼動している。実際に作っている様子を見せてもらった。すべて手作業で丁寧に作られており、真剣に作っている姿にも感動した。女性が自立して働ける場所がとても大切だと感じた（写真9）。

カンボジアの風俗は日本の風俗とは違い、場所が設けられているわけではない。カラオケ店やマッサージ店での買春が多く、そこでは成人に満たない少女が貧しさにより児童買春をさせられてしまう現状があった。海外から買春のために訪れる観光客をなくそうとする努力やNOという声をあげてゆきたいと感じた。



写真 8



写真 9



写真 10

4. フレンズ・インターナショナルのチャイルドセーフセンター

弱い立場におかれた子どもや若者、その家族、地域や社会に対して教育や職業訓練を支援し、子どもたちを性的虐待や出稼ぎ、麻薬などあらゆる危険から守るプロジェクトを行っている NGO 団体である。チャイルドセーフセンターの方や、トゥクトゥク¹⁾運転手から実際に話を聞いた(写真 11)。最近では海外からの観光客が増え、路上で物乞いをしている子どもや女性に対し、善意で物やお金を当与えてしまうことが多いようである。残念なことに実際に物乞いで与えられた物やお金はその人に与えられることはなく、その背景には物乞いをビジネスにしている組織のような存在にお金がすべて流れてしまうことを学んだ。筆者も道端で小さな乳児を抱えた女性が物乞いをしている姿を思わず見つめてしまい、何かしなければいけないのではないかと、このことを学ぶ前は思ってしまった。チャイルドセーフセンターは物乞いには良くない背景があることを観光客に知ってもらうために、トラベラーガイドも作っている。物乞いに関してだけでなく、日中でも夜中でも危険な目にあっている子どもたちや女性を見つけた場合、チャイルドセーフセンターに電話をするとトゥクトゥクドライバーが駆けつける支援も行っている(写真 13)。

観光客用に向けてのトラベラーガイドに記載されている 7 つの事柄

①チャイルドセーフセンターのメンバーを支援すること。

カンボジアのホテルやバイク、タクシー、トゥクトゥク、飲食店、インターネットカフェ、旅行代理店等は子どもを危険から守るためのトレーニングを受けている。チャイルドセーフセンターロゴマーク(図 2)のついた乗り物やお店を利用すること。

②路上、ビーチ、寺院などで物売りをする子どもから買う前に、よく考える。

また物乞いをしている子どもや乳幼児をつれた親にお金をあげることはやめる。

観光客が物やお金をあげてしまうことで子どもが路上で働き続け、その結果危険な目にあうことにもつながる。本当に子どもを助けたいと思うなら、直接何かを与えるのではなく、子どもたちがより良い未来を送ることができるような活動を支援しなければならない。



図 2 ロゴマーク

③子どもや家族を支援するために、チャイルドセーフ認定品を購入する。

直接子どもにお金をあげる代わりに認定品を購入することで、子どもへの支援につながる。認定品は、子どもたちを学校に通わせたいと願う親や、仕事を見つけるために職業訓練を受けた元ストリートチルドレンの若者の手で作られている。

④子どもの搾取につながるような行動はやめる。

カンボジアにはお金を得るために子どもを見せものにするような孤児院ツアーやスラム街ツアーが存在する。孤児院は子どもの家であり、子どもにとって安全で、プライバシーや権利が守られるべき場所だ。

⑤どのような理由であれ、自分の宿泊しているホテルの部屋に子どもを連れて帰ってはならない。

子どもを性的虐待する犯罪者に間違えられるなどのトラブルにまきこまれる原因になる。もし、助けを必要としている子どもを見かけたら、地元のチャイルドセーフ・パートナーに相談する。

⑥買春を容認している場所を利用しない。

ユニセフが行なった調査によると、東南アジアのメコン川流域諸国では、セックスワーカーの30～35%が12～17歳の子どもであることが挙げられている。つまり、買春を容認しているホテルなどを利用することは、子どもを危険にさらす状況を許していることになる。

⑦周囲に目を配る。危険にさらされている子どもを目撃したら、ホットラインに通報する。



写真 11



写真 12



写真 13

滞在地シエムリアップ

アンコールワットに代表される世界遺産の遺跡の宿泊地としての街シエムリアップは、ここがカンボジアなのかと疑うような洗練されたホテルが立ち並びブランド品の店がある観光地であった。欧米からの観光客も多いのであろうホテルも周辺施設もおしゃれであった。12世紀前半に作られたと言われるアンコールワット、アンコールトム、タ・プロム等の遺跡観光、夜には伝統芸能アプサラダンスを見物しカンボジア料理も楽しんだ。カンボジア料理は野菜がふ

んだんに使われて、味付けも甘いと感じるものが多くあり美味しくいただくことができた。食については満足であった、そのことは楽しい旅の一因であったと思う。

最後に

今回のツアーで、「子どもの権利」の研修はもちろんのこと、ポルポト政権時代の大虐殺やアンコールワット遺跡などカンボジアの歴史やカンボジアの食文化なども学ぶことができた。カンボジアは空が青く、空気も良かった。住んでいる人もとてもニコニコしていて良心的な国だと思った（写真 14）。中学生くらいの子がバイクに乗っている光景、農村部での放し飼いの犬や猫、豚、牛が人と共存している牧歌的な様子や人生で初めて野外トイレを体験したことなど、日本では決して経験することのできない村の生活を見ることができた。研修としての時間以外でも、ナイトマーケットや市場で買い物をしたり、トゥクトゥクに乗り街を案内してもらったりカンボジアを目いっぱい楽しむことができた（写真 15, 16）。



写真 14



写真 15



写真 16

カンボジアを訪れる前のイメージは、そこらに地雷が落ちてあり内戦の危険な痕が残っていて少し危険な国というイメージがあったのだが、そうではなかった。カンボジアの首都であるプノンペンやシェムリアップは想像していたよりも開発が進み観光化されていて驚いた。観光客のための高級ホテルや飲食店が立ち並び、車での移動手段が主流で、タクシーも多く見受けられた。しかし、農村部では道が舗装されておらず、車 1 台が通るだけでも精一杯な状況であったり、水（上水道）の整備もされていなかったりと、都心部と農村部の格差が大きいと感じた。

5泊6日という短い研修であった。その期間にカンボジアの農村部の小学校訪問、チャイルド・フレンドリー・スペースや子どもクラブで子どもたちと関わる事ができたこと、都市部では NGO 団体との交流やミーティング、観光、など貴重で、心に残る経験をする事ができた。

今回観光という目的でカンボジアに行くのではなく、学生に時にしか経験することができな

カンボジア「子どもの権利」研修ツアーに参加して

い研修ツアーとして訪れることができ本当に良かった。現地の状況や子どもたちの様子を生で見ることができ、子どもの権利を考えるよい機会になった。現地で研修をサポートして下さったシーライツの皆さんや研修を共に行った仲間の皆さんに感謝したい。4月から幼稚園教諭として働いている自身は、この経験を通して、子どもたちにカンボジアの子どもたちの様子から学んだことを伝えていく必要があると感じている。日本では当たり前のように教育が受けられたり、自由に遊んだりすることができても、それが当たり前ではない子どもたちもいることを知ってもらいたい。このカンボジア訪問は、今後、幼稚園教諭として多くの子ども達と出会う私にとって「子どもの人権」を学び考えることができる有意義な時間であった。

注

- 1) トゥクトゥクトとは旅客用のオート三輪の名称

文献

香川孝三「グローバル化の中のアジアの児童労働」明石書店, pp 108-120, 2010.

富山泰「カンボジア戦記」中央公論, pp 30-42, 1992.

中村浩「ぶらりあるきカンボジアの博物館」芙蓉書房出版, pp 25-28, 2015.

特定非営利活動法人 国際子ども権利センター C-Rights/シーライツ

<http://www.c-rights.org/> (参照日 2017年12月21日)